

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2025
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.75 (2025. 3) ,p.157- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20250300-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活 動 報 告

◇人事（2024 年度）

兼任講師委嘱

塩崎 隆敏（2024 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日）
杉原 佳堯（2024 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日）
杉林 浩典（2024 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日）
長谷川健司（2024 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日）
森 守弥子（2024 年 4 月 1 日～ 9 月 30 日）
尾崎 敦（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
茅島 秀夫（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
田中雄一朗（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
中川 聡之（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
中小路 徹（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
中島みゆき（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
細貝 亮（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
古田 大輔（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
水島 宏明（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
尹 在彦（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
吉田 哲郎（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
渡辺 嘉久（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
北村 智（2024 年 10 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
土井裕美子（2024 年 10 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
山澤 里奈（2024 年 10 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）

訪問学者の受入

・訪問研究員

井上 淳（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
尹 熙哲（2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日）
金 鎮旭（2024 年 4 月 15 日～ 2025 年 4 月 14 日）
李 鎬建（2024 年 8 月 19 日～ 2025 年 8 月 18 日）

◇特記事項

1. 出版物

- ・『メディア・コミュニケーション』No.75（2025 年 3 月）
- ・『Keio Communication Review No.47』（2025.3）
- ・『メディア・コミュニケーション研究所案内 2025

年度』（2025 年 3 月）

2. 催事

(1) 2024 年度春学期公開講座

「歴史、物語からジャーナリズムを考える」

講師：永井 紗耶子（小説家）

日時：2024 年 6 月 27 日（木）16：30～18：00

会場：三田キャンパス北館ホール

対象：制限なし

(2) 2024 年度秋学期公開講座

「『コジラ-1.0』の米アカデミー賞受賞と日本映画の 20 年」

講師：市川 南（東宝株式会社取締役専務執行役員）

日時：2024 年 10 月 21 日（月）16：30～18：00

会場：日吉キャンパス来往舎 2 階大会議室

対象：制限なし

(3) 綱町三田会ミニゼミ

「アメリカ大統領トランプ氏再選に見るいわゆる陰謀論と SNS—トランプ氏のアメリカ大統領就任まもなく—」

講師：津山 恵子（ジャーナリスト）「アメリカ大統領選を追って」※オンライン

講師：松見 芳男（伊藤忠商事理事）「変身するアメリカ共和党」※オンライン

司会・進行：瀬下 英雄（綱町三田会代表幹事）

日時：2025 年 1 月 21 日（火）18：30～20：00

会場：三田キャンパス大学院校舎 313 教室

対象：メディアコム研究生，教員，綱町三田会会員，現役ジャーナリスト他

3. 国際交流 (2024 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

(1) 訪問研究員研究成果報告会

日時：2024 年 1 月 29 日 (月) 11:00～12:30

会場：三田キャンパス研究室棟 B 会議室

報告者 1：文 準模 (韓国 SBS 放送局)

題目「韓国の少子化対策」

報告者 2：高 旻錫 (韓国日報社)

題目「J-POP と K-POP の相互影響について―日韓音楽 100 年の相互交流の歴史そして現在の変化」

(2) 韓国延世大学とのシンポジウム

日時：2024 年 11 月 16 日 (土) 12:30～20:00

会場：延世大学 (韓国ソウル特別市)

メディアコム登壇者：烏谷昌幸、津田正太郎、都倉武之、山本信人

烏谷教授、都倉准教授が報告をし、山本教授、津田教授がコメントした。慶應の参加者は 4 名、延世大学側の参加者は 12 名で、非常に有意義なディスカッションとなった。

◇国外出張 (2024 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

・出張者：津田 正太郎教授

目的：現地での資料収集

期間：2024 年 3 月 3 日 (日)～16 日 (土)

出張先：イギリス (ロンドン)

・出張者：李 津娥教授

目的：学会発表 (ECREA2024) 学会参加 (Mediaflows2024)、フィールドワーク

期間：2024 年 9 月 14 日 (土)～30 日 (月)

出張先：スロベニア (リュブリアナ)、スペイン (バレンシア)

・出張者：鈴木 秀美教授

目的：ドイツ国法学者大会出席、大学図書館で資料収集

期間：2024 年 10 月 6 日 (日)～14 日 (月)

出張先：ドイツ (ベルリン、フライブルク)、スイス (ルツェルン)

2024 年度研究所研究活動

1. 活動報告

○プロジェクト研究「インターネット時代のメディア法の行方Ⅲ」

代表 鈴木 秀美 (慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授)

プロジェクト・メンバー

駒村 圭吾 (慶應義塾大学法学部教授)

山本 龍彦 (慶應義塾大学法務研究科教授)

横大道 聡 (慶應義塾大学法務研究科准教授)

菅谷 実 (慶應義塾大学名誉教授)

井上 淳 (総務省電気通信事業部料金サービス課長)

穴戸 常寿 (東京大学大学院法学政治学研究科教授)

實原 隆志 (南山大学法務研究科教授)

杉原 周治 (名古屋県立大学外国語学部准教授)

曾我部真裕 (京都大学大学院法学研究科教授)

西土彰一郎 (成城大学法学部教授)

棟居 快行 (専修大学大学院法務研究科教授)

山田 健太 (専修大学文学部教授)

水谷瑛嗣郎 (関西大学社会学部准教授)

石塚壮太郎 (日本大学法学部准教授)

栗島 智明 (埼玉大学大学院社会科学部研究科准教授)

新井 貴大 (新潟県立大学国際地域学部助教)

(1) 研究経過

2016 年度から 3 年間、2019 年度から 3 年間のプロジェクトに続いて、2022 年度から第 3 期として「インターネット時代のメディア法の行方Ⅲ」というテーマで、インターネットの普及した時代において生じるメディア法の問題について研究を行っている。

(2) 今年度の研究活動

2024 年 7 月 26 日、第 11 回メディア法研究会をハイブリッドで開催した。松井茂記教授 (ブリティッシュ・コロンビア大学) が「キャンセルカルチャーと表現の自由」について報告し、報告後、参加者と意見交換した。

研究代表者は、2024 年 10 月 6 日～14 日、ドイツ (ベルリン・フンボルト大学とフライブルク大学) とスイス (ルツェルンで開催された国法学者大会) で、メディア法の最新動向について研究者や弁護士と意見交換を行った。また、2025 年 2 月 25 日～26 日、鳥取県と島根県の民間放送局においてヒアリングを行った。

○プロジェクト研究「映像メディアの社会心理学」

代表 李 津娥（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所）

プロジェクト・メンバー

李 光鎬（慶應義塾大学文学部教授）
川端 美樹（目白大学メディア学部教授）
鈴木万希枝（東京工科大学教養学環教授）
山本 明（中部大学人文学部教授）
大坪 寛子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員）
志岐 裕子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員）
正木 誠子（関東学院大学人間共生学部専任講師）

(1) 研究経過

本プロジェクトは、現代のメディア環境における映像メディアの役割に焦点を当て、オーディエンスが映像メディアをどのように利用し、その影響をどのように受けるのかを社会心理学的な観点から実証的に検討するものである。具体的には、ニュース映像が現実認識に与える影響、映像エンターテインメントの受容とその効果、多様化する映像コンテンツと広告との関係を中心に研究を進めている。また、グローバルな視点から、トランスナショナルな映像メディアの受容や、世代間におけるメディア利用の違い、さらにジェンダーの観点も考慮して分析を行っている。

今年度は定性調査として、報道記者を対象にした災害報道写真に関する専門家インタビュー、およびオーディション番組の受容に関するインタビュー調査を実施した。7月30日に開催された研究会では、生成AIを用いた画像評価に関するネット調査の中間報告と、オーディション番組の受容に関する調査計画の発表が行われ、活発な意見交換がなされた。また、新たな研究課題として、ポジティブメディア心理学の視点を取り入れ、ウェブ実験を通じて映像メディアが人々の心理的健康や幸福感に与える影響の検証を進めている。インタビューやウェブ実験の結果は、今年度3月および次年度に開催予定の研究会で報告される予定である。

さらに、研究代表者と研究分担者が、映像メディアと関連する国内の学会として日本映像学会（6月1日・2日開催）、映画学会（12月14日開催）に参加し、映画と動画に関するビジュアル分析手法につ

いて重要な知見を得た。

(2) 研究成果

今年度9月には、第10回ヨーロッパコミュニケーション学会ビジュアルセクションの「身体と場所の表象」において、韓国の恋愛リアリティ番組におけるビジュアル表象について、研究代表者と研究分担者による共同発表を行った。現在、次年度の国際学会および学術誌への発表に向けて、次のテーマについて研究を進めている。韓国の恋愛リアリティ番組が韓国社会や恋愛における不平等に及ぼす影響、日本におけるフェムバタイジング（女性エンパワーメント広告）のビジュアルとナラティブの分析、そして日本の女性政治家報道におけるフレーミング手法の検討である。

さらに、研究代表者と研究分担者による共同研究として、以下の2つの論文を2025年度第5回国際社会学会社会学フォーラムに投稿した。1つ目は“Sanitized Love: Exploring the Idealization of the Urban Middle-Class Dating Culture in South Korea”であり、2つ目は“Empowering Message or Marketing Gimmick? Japanese Consumers' Engagement with Femvertising”である。2つとも採択されており、次年度の学会で発表を行う予定である。

○プロジェクト研究「メディア化する政治コミュニケーション」

代表 津田正太郎（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授）

プロジェクト・メンバー（2025年1月現在）

大石 裕（十文字学園女子大学特別招聘教授）
烏谷 昌幸（慶應義塾大学法学部教授）
山腰 修三（慶應義塾大学法学部教授）
山口 仁（日本大学法学部教授）
平井 智尚（日本大学法学部准教授）
三谷 文栄（日本大学法学部准教授）
新嶋 良恵（十文字学園女子大学専任講師）
佐藤 信吾（大妻女子大学社会情報学部専任講師）
湯本 和寛（信越放送）

(1) 研究経過

2024年は政治とインターネットとの関連が改めてクローズアップされた一年だった。7月の東京都知事選挙や11月の兵庫県知事選挙では、ソーシャ

ルメディアで支持を拡大させた候補者が躍進、または当選を果たす一方、いわゆる「オールドメディア」の影響力の低下が語られるようになった。その主張の是非は措くにせよ、政治とメディアとが不可分なものとして語られるようになっている。本研究プロジェクトのキーワードである「メディア化」は、そうした事態を分析するための有用な視座を提供している。

本研究グループは、マスメディアやインターネットにおける政治コミュニケーションについての研究を重ねてきたメンバーで構成されている。研究代表者の津田は、ヨーロッパのコミュニケーション研究で注目される上記の「メディア化」概念について検討を行ってきた。グループの他のメンバーは必ずしもメディア化研究の視座に立っているわけではないが、いずれも現代における政治コミュニケーションの問題について研究を蓄積している。

(2) 研究成果

メンバー全員が執筆した『ソーシャルメディア時代の「大衆社会」論』を2024年4月にミネルヴァ書房から刊行した。これまでの本グループの共同研究の成果をまとめたものである。加えて、本研究の成果の一部を盛り込んだ一般読者向けの著作として、津田が『ネットはなぜいつも揉めているのか』を5月にちくまプリマー新書として刊行した。加えて、本研究プロジェクトのメンバーのうち、鳥谷、山腰、津田の3名がそれぞれ一章ずつを担当した駒村圭吾／水谷瑛嗣郎編『メディア法のゆくえ（仮題）』が2025年中に尚学社から出版される予定である。

さらなる研究の進展を図るべく、2024年夏に実施した研究合宿では、ソーシャルメディアのプラットフォーム企業が生み出す政治・社会的影響に関する研究、米国における「被害者性の政治」とメディア批判の関係性に関する研究、政治シンボル論からの陰謀論に関する研究、フェイクニュースの拡散における情動の役割に関する研究などに関する研究報告を行った。

ここからさらに研究を進展させ、プロジェクト3年目の終わりには『メディア・コミュニケーション』の特集において成果を発表したいと考えている。

○プロジェクト研究「グローバルイゼーションと持続可能なメディアのデザイン：意識とモビリティーズ」

代表 小川（西秋）葉子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所専任講師）

プロジェクト・メンバー

片岡 栄美（駒澤大学文学部教授）

橋元 良明（東京大学名誉教授）

太田 邦史（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系教授）

河合 恭平（大正大学心理社会学部准教授）

(1) 研究経過

本研究プロジェクトの目的は、メディア・コミュニケーション研究におけるモビリティーズ概念の理論的有効性とそのアプローチの持つ多様性と可能性を探り、社会学・心理学・地理学・生命学などと接続をはかることにある。過去における関連プロジェクトにおいては、リサーチ・デザインを主眼におき、生命における可塑性であるダイナミック・インスタビリティという概念を多様な生命のかたちと機能において考察した。その成果は、『生命デザイン学入門』（小川〔西秋〕葉子・太田邦史編、岩波書店、2016年）において出版された。前回の関連プロジェクトでは、そのような知見をさらに具体的なメディア分析に応用し、研究・教育両面において貢献するために『モビリティーズのまなざしージョン・アーリの思想と実践』（小川〔西秋〕葉子・是永論・太田邦史編、丸善出版、2020年）を出版した。

(2) 研究成果

本年度は、学術会議大会における発表を中心に研究活動をおこなっている。すでに、研究分担者の太田邦史と橋元良明は関連学会における発表を済ませ、高い評価を得た。それに加え、その他の3名は2024年11月9日、10日に京都産業大学で開催された第97回日本社会学会大会においてそれぞれ報告申し込みが採択された。具体的には、小川（西秋）葉子「時間をめぐるプラグマティズムの系譜2：跳躍と仮面＝ネオ・ペルソナ」（テーマセッション「時間の社会学」と社会学時間批判Ⅱ）、片岡栄美「現代日本における文化の境界感覚と新しい文化資本、ハビトゥス」（セッション階級・階層・移動2）、

河合恭平「アーレントの親密圏論とマッチングアプリ」（テーマセッションデジタル文化と親密圏）である。

また、昨年度に引き続き、本研究所の紀要『メディア・コミュニケーション』75号には研究代表者の小川（西秋）が学会発表のリアクションをふまえた関連論文「ウィリアム・ジェイムズの軌跡1—心理学・宗教的経験・プラグマティズム」を投稿した。

すでに、一昨年度、昨年度と連続して、『メディア・コミュニケーション』誌上で特集を組み、これまでのプロジェクト研究成果の公表をすすめてきた。来年度の研究課題として、出版予定である書籍を担当する編集者の2度にわたる入院・手術からの回復を待ち、以上のような知見を今年度までのプロジェクトを受け継ぐ新規プロジェクトにおいてさらに探究してゆくことが研究の発展に寄与すると考えられる。

2. 個人研究活動報告

○鈴木 秀美

・メディア法についての研究

2024年10月16日、秋田市で開催された第77回新聞大会において、「研究座談会1 新聞は生き残れるか」に、中村史郎氏、たかまつなな氏、佐川博之氏とともに登壇した。その概要が、秋田魁新報2024年10月17日（朝刊16-17頁）、新聞研究2024年12月号（8-15頁）に掲載された。

放送倫理・番組向上機構編『BPOの20年 そして放送のこれから』（2024年3月）に「BPO設立20周年に寄せて」を寄稿した（131-136頁）。インタビュー「取材源秘匿権 明文規定を」が、朝日新聞2024年7月5日朝刊11面「耕論 報道の自由 守るには」（聞き手：豊秀一）に掲載された。『情報法制研究』16巻（2024年11月）に巻頭言「ニュースサイトへの家宅搜索と取材源秘匿権」を寄稿した（1頁）。2023年10月に日本公法学会（神戸大学）で行った総会報告「公法解釈とソフトローの包摂・競合—情報法を中心として」が、『公法研究』85号（2024年10月）に掲載された（45-65頁）。2024年11月23日、メディア激動研究所の第1回セミナーにて、基調講演「報道の自由と取材源の秘匿—鹿児島県警問題を中心に」を行った。

2023年6月、日本メディア学会企画委員長となり、2024年6月に成蹊大学にて対面で開催された

春季大会と、10月26日にオンラインで開催された秋季大会の運営を副委員長2名とともに担った。その後、2025年6月に立命館大学にて対面で開催予定の春季大会の開催準備にあたっている。

・ドイツ憲法についての研究

ドイツ憲法判例研究会の代表として、2013年度より同研究会の様々な活動を企画・運営している。今年度も全部で10回の研究会を開催した。同研究会は、その成果を雑誌『自治研究』に「ドイツ憲法判例研究」として連載している。ドイツ憲法判例研究会編（鈴木秀美・宮地基・三宅雄彦編集代表）『ドイツの憲法判例V』（信山社）の2025年春の刊行を予定している。

また、同研究会が2015年から行っているドイツの研究者グループとの共同研究の一環として、2024年9月16日～18日、広島大学（東千田キャンパス）にて「日独憲法対話2024」（テーマ：憲法の発展V—学際性による憲法の発展）を開催した（使用言語ドイツ語、通訳なし）。

フリッツ・テュッセン財団の助成により、ドイツから15名の研究者（マティアス・イエシュテット教授、ラルフ・ポッシャー教授、クリストフ・メラース教授、オリバー・レプシウス教授、マティアス・コルニルス教授、クリスチャン・ヴァルトホフ教授、ガブリエレ・ブリッツ教授、クリスチャン・ヴァルター教授、クリスチャン・ブムケ教授、ヨハネス・マーシング教授、マティアス・ルッフエルト教授、マルティン・ネットスハイム教授、ウヴェ・フォルクマン教授、アンナ・ベッティナ・カイザー教授、クリストフ・シェーンベルガー教授）が参加した（日独合計の参加者は約60名）。

日独の教育・研究と裁判所の交流への貢献を理由に、2024年4月5日、ドイツ大使館（広尾）にて大使から「ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章」を授与された（2023年12月12日付）。

・偽情報対策についての研究

2023年、日本学術振興会「学術知共創プログラム」として採択された共同研究「偽情報と政治的分断に関する東アジア諸国を中心とした包括的研究」（研究代表者：粕谷祐子教授、2028年度までを予定）に研究分担者として参加している。インターネット上の偽情報蔓延が政治的分断の一因となっていることを受け、東アジアの民主主義国を対象に、偽情報蔓延を防ぎ、さらには偽情報が政治的分断に与える影響を低減するための包括的な処方箋を模索するこ

とを目的とするこの共同研究において、東アジア諸国の政治状況についてのヒアリングを進めながら、政策提言の手がかりとして欧州の政策動向についての調査も行っている。2024年8月12日、ファクトチェックメディア「InFact（インファクト）」が主催したシンポジウム「『官製ファクトチェック』の出現を危惧する」（オンライン開催）に登壇して意見を述べた。

○李 津娥

1. ディアスポラのメディア利用とその影響

2023年度にNordMediaの大会に参加し、「メディア、グローバリゼーション、および社会変動」に関するディビジョンでヘルシンキに在住する韓国ディアスポラのメディア利用とアイデンティティに関するインタビュー結果をまとめた論文を発表した。その報告とオスロ在住の韓国ディアスポラを対象としたインタビュー結果をまとめた論文が*Keio Communication Review*に掲載される予定である[1]。

本論文は、北欧都市に住む韓国ディアスポラのメディア消費を通じて、母国メディアが彼らの経験やアイデンティティ形成に与える影響を検討したものである。韓国人ディアスポラへのインタビューを基に、母国メディアが文化的つながりの維持やホームシックの軽減、心理的な安定感を提供する重要な役割を果たし、インターネットや直行便の発展により母国との距離感も縮小されている一方で、北欧社会への適応に課題も生じていることを明らかにした。それでも多くの参加者が現地社会との関わりを持ちながら、韓国と北欧の要素を取り入れたハイブリッドなアイデンティティを形成していることを示した。

2. 政治コミュニケーションおよびビジュアル文化

2024年09月14日～2024年09月30日の出張では、スペインのバレンシアで開催されたMediaflows2024に参加し、さらにスロベニアのリュブリャナ大学で開催されたヨーロッパコミュニケーション学会（ECREA：European Communication Research and Education Association）で発表を行った。

Mediaflows2024のテーマは「デジタル領域における市民権」であり、ワシントン大学のランス・ベネット教授による基調講演は、現代アメリカの政治と情報環境を、分断された社会における市民、政治

コミュニケーション、文化戦争という視点から考察した内容で、主催校であるバレンシア大学のコメントーターや、基調講演に参加した研究者たちと活発な議論が交わされた。政治コミュニケーションに関するセッションでは、アルゼンチンの政治家ハビエル・ミレイの過激な政治パフォーマンスが、カーニバルの持つ混沌や過剰さなどのように結びつき、大衆に影響を与えているかを分析した研究や、イスラエルの反戦デモにおけるドローン映像を通じたデモのイメージ形成と報道のあり方を考察した研究などが発表され、活発な議論が行われた。

その後、第10回ヨーロッパコミュニケーション学会に参加し、ビジュアルセクションの「身体と場所の表象」をテーマとしたセッションにおいて、韓国の恋愛リアリティ番組における若者のデート文化や関係性の表象、社会や恋愛における不平等の問題を考察した研究について共同発表を行った[2]。この発表に対して、アジアと欧米の恋愛リアリティ番組の比較に関する提案や、恋愛番組のファンでもある若手研究者たちから有意義なコメントを得た。他の研究発表からも、ビジュアル分析に関する重要な示唆を得ることができた。今回の研究成果を基に、さらなる分析を進め、論文の執筆を行う予定である。

また、政治コミュニケーションに関連して、情報法制学会が刊行する『情報法制研究』第17号の特集「選挙と情報」において、「選挙と情報」の文脈の中でのメディア心理について論じる依頼論文を執筆する予定である[3]。

3. サステナブルファッションとメディア

新たな研究課題として、日本における古着市場の成長が消費者の環境意識の高まりとファッションメディアの影響に密接に関連していることを踏まえ、古着購入の動機とデジタルメディアの役割を分析した研究がメディア・コミュニケーション研究所紀要に掲載される予定である[4]。特に、消費者の認識や行動を形作る文化的影響、デジタルプラットフォーム、メディアの相互作用に焦点を当て、古着消費が日本の持続可能なファッション実践にどのように貢献しているかを分析した。

4. 若年層の視点からみた広告とジェンダー表現

2023年春に刊行した編著『クリティカル・オーディエンス—メディア批判の社会心理学』（新曜社）

に収録された「フェムバタイジング (Femvertising)」と呼ばれる女性エンパワーメント広告への消費者の態度を分析した章を基に、若年層の消費者による批判的視点を通じて、現代の広告がジェンダー問題にどのように対応する可能性があるかを考察した論評が『日経広告研究所報』に掲載される予定である[5]。

その他、「Vlog に惹かれる心理—ライフスタイルメディアとしての Vlog の利用動機と影響」(学事振興資金・研究科枠, 個人研究), 「トランスナショナルメディア・オーディエンス—韓国エンターテインメントの受容と影響」(学事振興資金・共同研究, 研究代表者) という 2 つのプロジェクトに関連するウェブ調査やフィールド調査を実施する予定である。

研究成果は下記の通りである。

- (1) Lee, Kwangho. & Lee, Jinah (2025). Media, place, and identity of the Korean diaspora in nordic cities: From the perspective of media geography and cross-cultural adjustment, *Keio Communication Review*, 47 掲載予定
- (2) Lee, Kwangho, & Lee, Jinah (2024, September 27). "Realities" of dating: Visual representation of romantic love in Korean dating reality shows. Representations of Bodies and Spaces Session, Visual Cultures Section, The 10th European Communication Conference, European Communication Research and Education Association, Ljubljana, Slovenia
- (3) 李津娥 (2025). メディアは選挙にどのような影響を与えているか—政治報道と政治広告の効果に関するメディア心理学からの考察— 情報法制学会『情報法制研究』17 掲載予定 (依頼論文)
- (4) Jinah Lee (2025). From furugi to the future: Exploring motivations, media and cultural values shaping second-hand clothing practices 『メディア・コミュニケーション』75 掲載予定
- (5) 李津娥 (2025). 広告とジェンダー表現 『日経広告研究所報』2025 年 2 月 1 日号「広告アゴラ」掲載予定 (依頼記事)

○津田正太郎

・「メディア化」に関する研究

今年度は政治のメディア化について検討するうえで「メディア批判」に焦点を当てて研究を行った。現代政治において「メディア批判」は、政治アクターが自らの支持基盤を構築、補強するうえで重要な政治的資源となった。つまり、メディア報道の問題を具体的に指摘するのとは別に、いわゆる「主流／オールド／レガシーメディア」をエスタブリッシュメントの一部として攻撃対象とする一方、それに対抗する「われわれ」の集合的アイデンティティを主にソーシャルメディア上で構築し、政治的基盤として活用する試みが世界中でみられるようになっている。これもまた政治のメディア化の変則的パターンとして把握できるのではないかと考え、今年度は米国の事例を中心に研究した。

・戦争プロパガンダに関する研究

数年間から継続している第二次世界大戦期における英国のプロパガンダ政策に関する研究を今年度も実施した。2024 年 3 月に英国の BBC 文書アーカイブ、英国図書館、ナショナル・アーカイブで資料収集を行い、それらをもとに論文を執筆、本誌に掲載した。今回は英国のプロパガンダ政策とインド独立運動との関連に焦点を当てて議論を行ったものの、紙幅の関係からプロパガンダの背景に関する記述は割愛せざるをえなかった。いずれ書籍化するさいに改めて収録したいと考えている。来年度は英国のプロパガンダ政策についてベンガル飢饉との関連を中心に研究を進める予定である。

・ソーシャルメディア上での分断に関する研究

ソーシャルメディア上でなぜ激しい分断が起きているのかをメディア・コミュニケーション論、社会学、政治学、社会心理学的な観点から論じた一般向け著作『ネットはなぜいつも揉めているのか』を 2024 年 5 月にちくまプリマー新書として刊行した。

・メディア環境の変化が「想像の共同体」にもたらす影響の検討

稲増一憲氏 (東京大学准教授) および齋藤僚介氏 (大阪大学助教) との三名で科研費 (挑戦的研究 (開拓)) を取得した。2024 年 6 月から 2029 年 3 月までの長期にわたる研究プロジェクトであり、メディア環境の変化が「見ず知らずの同胞」に対する想像力や連帯意識にいかなる影響を及ぼすのかを実証的に研究する予定である。

○小川（西秋）葉子

「サステナブル・メディアと集合的生命の研究」

これまで慶應義塾大学理工学部、同大学院理工学研究科総合デザイン工学専修（環境親和工学専修、ライフデザイン工学専修）等で行ってきた研究成果をふまえ、持続可能性（サステナビリティ）と非線形性（ノンリニアリティ）をメディアとグローバルな生命現象との関係で、学際的・理論的に総括をおこなってきた。

2009年度より、映像アーカイヴズの分析と年代・場所・個体の鑑定を要するメディアにおける身体文化遺産の進化的行動学的な研究も開始された。2013年度に着手された言説アーカイヴズと人工物をめぐる認知行動学的研究は、本研究所プロジェクト「グローバルライゼーションと持続可能なメディアのデザイン」によって得られた比較考察および研究手法の精緻化により、理論的な裏付けを得られつつある。

このような成果をふまえ、2015年度には、小川（西秋）葉子・太田邦史編（2016）『生命デザイン学入門』（岩波書店）が出版された。2017年度には同書共同執筆者の論考が*Nature*に掲載されるとともに、*Science*にも関連論文が発表されたことで本研究分野の広がりや方向性が確認された。

2018年度には、メディアコム共同研究プロジェクトの研究活動において、上記研究の理論的な成果を適用した。2019年度には、心理学史において、上記の諸研究の始原を求めた。それらを総合する形で、2020年度には、「メディア・ジャンルと知覚のモビリティーズ—ジャーナリズム映画批評の源泉」『メディア・コミュニケーション』71号や出版予定の編著において、知覚論、情動論、感情研究、リスク論、アフォーダンス論におけるハイブリッドな音響マーカーの考察を進めた。

2021年度においては、これまでの成果を「集合的生命前史：＜グローバルライゼーションを＜転調＞する＞」という論文にまとめ、一橋大学大学院社会学研究科より博士号を授与された。2022年度には、アメリカ合衆国という具体的な場所の地理歴史において、上記の研究から得られた知見を展開する必要性を認識し、そこにジャーナリズム史に関連させる方向を確認した。2023年度には、日本社会学会報告「時間をめぐるプラグマティズムの系譜：ジェイムズ、パーク、ゴフマンを中心に」をはじめとして社会学史との接点を探った。2024年度には、日本社会学会報告「時間をめぐるプラグマティズムの系

譜2：跳躍と仮面＝ネオ・ペルソナ」において、日本におけるプラグマティズムの水脈に社会学者の見田宗介を位置づける試みをおこなった。

その一方で、筆者が担当する「メディア・コミュニケーション研究所特殊研究V（グローバル・メディアデザイン論）」では、古典的な神話や物語において、人・神・動植物・モノなどの集合的な生命の連環がメタモルフォーゼとして描かれた諸事例を考察し、それらが現代の思考様式やメディアにも影響をあたえている可能性が探究された。

「グローバルライゼーションと海外在住日本人の時間—空間の再編成の研究」

PhD研究として進められてきた英国ロンドン、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴ、香港のフィールドワーク調査を通じた在外日本人のメディア実践の研究も継続中である。言説分析と行為分析（エスノグラフィ）の両面からアプローチをはかる永年の研究は、モビリティという概念を導入することで時間—空間に拡張された集合的生命とデザインをめぐる、より包括的な理論研究へと発展しつつある。

2017年度は、言説分析をノンリニアな時間における行動分析と照合した研究を“Global Telepoiesis on the Edges of Times: Cities That Matter in Media Mobilities”として*Keio Communication Review* No.40に掲載した。2018年度には、上記論文の続編を執筆し、複数の都市におけるディアスポラのメディア体験を1年間のカレンダー周期を持つマルチ・サイテッド・エスノグラフィーとして“Global Telepoiesis at Work: A Multi-Sited Ethnography of Media Mobilities”と題して*Keio Communication Review* No.41誌上に発表した。2019年度には、メディアコム共同プロジェクトにおいて、上記の成果を反映させつつ、ほかのメディア分析に応用可能な、理論的精緻化を図った。

2020年度においては、『モビリティーズのまなざし—ジョン・アーリの思想と実践』という前出の編著において、モビリティーズ、アクター・ネットワーク理論と複雑系分析において上記の成果を統合させた。2021年度は、上記の博士論文に本研究をコンテキストとして、別のアプローチからの洞察を発表した。2022年度には、すでに筆者は2000年代からアンリ・ルフェーブらによる「リズム分析」をエスノグラフィとして実践してきたことを確認す

るとともに、現在取り組んでいる研究につながる理論的なルーツを再発見することとなった。

2023年には、「時間の社会学」との関連を上記の第96回日本社会学会報告と『メディア・コミュニケーション』74号掲載「特集：グローバル化と持続可能なメディアのデザイン—意識とモビリティーズ2まえがき」によって模索することとなった。

2024年には、さらに第97回日本社会学会報告でのフィードバックをもとに、『メディア・コミュニケーション』75号「ウィリアム・ジェイムズの軌跡1—心理学・宗教的経験・プラグマティズム」によって時間—空間概念と多元的宇宙論との関連を探った。

このような研究面での進展は、教育面でも成果を示し、筆者が担当する「メディア・コミュニケーション研究所特殊研究Ⅳ（メディア・コミュニケーション論）」でも、上記分野に関心を持つ学生たちにフィードバックされた。

「グローバル化とメディア・ディスカールの研究」

映画をめぐるクロス・メディア研究の一環として、ロケーションを伴う都市映画の認知過程を明らかにしてきた。2013年度、「音楽からはじまる第4回三田映画祭」（於：慶應義塾大学三田キャンパス東館G-SECラボ〔現：グローバル・リサーチ・ラボ〕、2013年11月10日実施）を開催した際、SFファンタジーというジャンルを設定することで、メディア間、あるいはメディア内外のプロトタイプとカテゴリーの関連を探求することが可能になった。2014年度はそれをデザインとシミュレーション手法との関連で考察を進めた。2015年度は、近年加速化している社会におけるメディア間のコンテンツ共有の実態に目を向ける歴史的な事例に対する理解が深まった。

2016年度は、映画のジャンルと集合的記憶に関する知見の一部を論文として発表した。2017年度は、都市という時間—空間におけるメディア内容、アトラクション、メディア人工物などの相互作用を観光客がディアスポラに与える影響をふまえて考察し、“Global Telepoiesis on the Edges of Times: Cities that Matter in Media Mobilities”として *Keio Communication Review* No.40 に掲載した。2018年度は、メディアコム共同プロジェクトにおいて、本研

究で考察を続けてきた映画を他の映画と比較した論考を発表するとともに、映画ジャンル知覚における具体的な指標の候補を選定した。2019年度には、近年の映画において、過去の映画分析の知見をどのように生かすことができるのか、比較研究を進めた。

2020年度においては、「メディア・ジャンルと知覚のモビリティーズ：ジャーナリズム映画批評の源泉」『メディア・コミュニケーション』71号によって、ラジオ、テレビ、映画などのメディア発達史との関連で、ジャンルと音響の効果を考察した。2021年度には、「時間地理学と音楽コレオグラフィによるモビリティーズ映画探究：『アベンジャーズ／エンドゲーム』（2019）分析におけるエンタングルメント概念の効用」『メディア・コミュニケーション』72号として、これまでの考察を最近のSFハリウッド映画の分析に応用した。

2022年には、以上のような問題意識は、メディア・コミュニケーション研究所共同プロジェクトにおける4本の論文に先立つ前書きである小川（西秋）葉子（2023）「特集2：グローバル化と持続可能なメディアのデザイン—意識とモビリティーズ」『メディア・コミュニケーション』73号に反映された。さらに、2023年には、小川（西秋）葉子（2024）「特集：グローバル化と持続可能なメディアのデザイン—意識とモビリティーズ2まえがき」『メディア・コミュニケーション』74号において、特集論文のうち理論篇3本、調査篇3本を架橋する助けとなった。

2024年には、プロジェクトにおける編集出版作業において、映画批評と書評のディスカール解説をおこなう際、上記のような経験を参照した。

加えて、筆者が担当する「映像メディア論Ⅰ」「映像メディア論Ⅱ」「メディア文化論Ⅰ」「メディア文化論Ⅱ」「メディア・コミュニケーション研究所特殊研究Ⅳ—メディア・コミュニケーション論」「メディア・コミュニケーション研究所特殊研究Ⅴ—グローバルメディア・デザイン論」などの授業を通じた教育活動にも、その知見が活用された。